

未来を否定されるものの未来の可能性を考える —ジュディス・バトラー『問題＝物質となる身体』の

A セクシュアル的な解釈

井村 麗奈

はじめに

ジュディス・バトラーの *Bodies That Matter: On the Discursive Limits of "Sex"* の全訳、『問題＝物質となる身体：「セックス」の言説的境界について』が2021年5月に出版された。原著は1993年出版なので、待望の日本語訳だ。本稿はこの本の議論をAセクシュアルの問題系¹へ接続し、拡張してみることを目的としている。本稿では、第一節で性愛を本能だと考えること、第二節で形成過程が隠ぺいされた強固な主体、第三節で一つの種が自己増殖していく未来のイメージを問題にする。それによって、未来を否定されるものの未来の可能性を示したい。

『問題＝物質となる身体』の大きなポイントは、自然で前言説的な物質というものが、何を理解不可能なものとして棄却することで成り立つのかという問いと、物質や権力、自己同一化の対象が反復や引用によって力を持つことに、希望を見つけることだと思われる。バトラーは徹底的な脱構築を行うことで、前言説的なものを成立させる言説を分析し、反復行為によって力を得る権力がまさにその反復行為によって転位する可能性を指摘する。

また、この本は『ジェンダー・トラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』で生じた誤解を解くという側面もある。『ジェンダー・トラブル』では、ジェンダーの構築とともに自然で前言説的な物質としての身体も構築されているという主張が見落とされてしまった。結果、ジェンダーは服のようなのだと誤解され、服を着る身体の物質性が保たれてしまった。男女二分法などの身体の物質性と思われるものの成立を批判的に分析するのが、『問題＝物質となる身体』であった。

なかでも注目したいのは、『問題＝物質となる身体』でバトラーは、主に同性愛と女性に関する議論を「排除領域」^{フォアクローズ}「予めの排除」「構成的外部」「棄却された領域」として扱っている²が、その領域を閉じているわけではないという点である。バトラーは、「排除領域」や「外部」を独占、固定することを拒否している³。その態度は、第

八章でクィアという語を「その語が排除しているが、それによる代理表象を期待することが正当であるような人々によって、その語を自由に征服させることが必要となる⁴⁾」と説明することにも繋がっているだろう。バトラーの徹底的な脱構築の姿勢と行為遂行の考え方は、開かれていること、変化していくことを求めている。

したがって、バトラーとは異なる事例によって、私が語ることのできる

フォアクローズ

「予めの排除」について書くことは意味のあることだろう。

実際、フェミニズム政治とクィア政治の両者が結集されるのはまさしく、性的差異を物質化する統制的規範への非同一化を強調する実践を通じてなのだ。こうした集合的の非同一化が促し得るのは、どんな身体が問題＝物質となるのか、そして、どんな身体が批判的関心事として今後現れてくるのかを再構築することなのである。⁵⁾

本稿では A セクシュアル、死、未来、非人間、生殖といったことをキーワードに、排除にさらされる三つの身体を『問題＝物質となる身体』に接続していく。フェミニズム政治とクィア政治の結集点となる身体について、私なりに構想することで攪乱に寄与できればよいと思う。

1. 『問題＝物質となる身体』と A セクシュアル

1-1 性生活＝生殖を否定するだけでは足りない

第一節を『問題＝物質となる身体』と A セクシュアルと題したが、ここでの A セクシュアルは性的に惹かれる経験をしない人という一般的定義からさらに広げて、生殖と性生活のどちらもが強制として響く者という意味で用いている。恋愛的指向についても含めて細かく分けたり、A セクシュアルの領域を厳密に明確化したりするよりも、生殖せよという命令が、性生活を行えという形の強制としても響く人々として区切るほうが、本節の議論においては意味があるだろう。バトラーの性生活＝生殖を否定する議論は、生殖と性生活のどちらもが強制として響く者にとって、どのように解釈することが可能なのか、その一例を示すことが本節の目的である。

本節の A セクシュアルという言葉は、セクシュアル・アイデンティティからはみ出るような部分も含め、広い範囲を想定している。セクシュアルを否定する接頭辞 A に寄せられる様々な憶測とともに、異性愛制度と生殖に対峙しようというのが、本稿の A セクシュアル的問題系のビジョンである。したがって、これによって A セ

クシユアルが説明可能になる、理解可能になるということはありませんし、ここで示せるのは『問題＝物質となる身体』の解釈の一例でしかない。より細かく A セクシユアルについて知りたい人は、A セクシユアルの当事者ネットワーク Asexual Visibility And Education Network(AVEN)を閲覧することをおすすめする。

さて、A セクシユアルにとって『問題＝物質となる身体』は何の躊躇いもなく協調して読むことができる本ではない。それは『問題＝物質となる身体』が同性愛を主要な論点にしているからだ。しかし、この本を A セクシユアル的に読解することは可能だと思われる。本節では、第二章「レズビアン・ファルスと形態的想像界」を中心に A セクシユアルへの接続を試みる。

まず、なぜ A セクシユアルにとって、『問題＝物質となる身体』は何の躊躇いもなく協調して読むことができる本ではないのか。バトラーは日本語版への序文で、あらゆる性化された身体が生殖可能なわけではなく、生殖を希望せず生きてきた人がいると書き、以下のように続けた。

生殖せよという命令に対する身体化された立場の多様性を考えれば、性化された身体を生殖の諸関係の外部で考えることは必要であり、倫理的義務でさえある、と主張することはできるでしょうか。結局のところ、性的再生産[＝セックスによる生殖]は、身体性のセクシユアリティを組織し理解する一つの方法でしかありません。もし生殖が、性化された身体可能な構成要素を可能な生殖機能に照らして定義することで、性化された身体について私たちが考える唯一の方法になるとすれば、そのとき、生殖にいかなる関連も持たない性生活の可能性を除外することになってしまいます。⁶

この文章で、性的再生産を性化された身体を理解する唯一の方法としたときに除外されるものとして主に想定されているものは、本文と照らしてみても、生殖に結びつかない同性愛の性生活だろう。バトラーは性生活＝生殖を否定している。

これに対して、「生殖を希望せず、生殖なしに人生を過ごしてきた」人といっても、やはり生殖が疑問に付されているだけで、親密さ＝性生活、性欲＝本能という図式が問われるわけではないことに、A セクシユアルな視点から落胆することもできる。また本節で扱う第二章のテーマであるレズビアン・ファルスも、ファルスを起源の場にするすることで起こる矛盾と抹消を露にすることで、フロイトとラカンによる性源域のファルスへの還元を反転しているが、身体的痛み＝性的刺激をもたらす「性源活動」が自我を形成するという自体は、直接的に批判されていない。性的刺激が身体と自我の起源にあるという説明は、それを積極的に望まないことや A セクシ

ュアルな状態を自然に反した奇妙なこと、病だとする大きな根拠になる。

A セクシュアルにとっても生殖せよという命令、例えば異性愛的な生殖こそが、成熟した人間の証拠であるという説明は、A セクシュアルを棄却し、異性愛を強制する権力として作動している。これによってA セクシュアルは、いずれ望ましい異性愛者になる未熟な存在だと、奇妙さを未だ成熟していないという形で無力化され、未来でもA セクシュアルとして生き続ける可能性を抹消される。そのようにして、A セクシュアルを棄却したものは、未来に勝ち逃げてしまう。したがって、パトラ一とともに生殖せよという命令を批判することはできる。

だが異性愛でなくとも、似たような形でA セクシュアルの未来を否定することがある。性行為こそが親密さの現れで、それを望むことは本能による自然なことだという説明によって、性対象が異性愛に対してクィアな人々でも、A セクシュアルの未来を否定する。A セクシュアルな状態にあることには様々な憶測が飛び交うが、結局A セクシュアルのまま未来に生きることを肯定的に表現するものは少なく、納得するための説明がされることが多い。

例えば、性自認を誤解しているのではないか、本当は同性愛者なのを隠しているのではないか、同性愛者である自身を受け容れられていないなどの理由で、無理に性愛の対象ではない存在と恋愛しているから、性的に惹かれないのではないか、本当の恋愛をしていないのだ、など。さらに、過去に性的トラウマになりうる経験があったり、過度なストレス状態と判断される状態にあったりすれば、性的欲求低下障害(HSDD)や性嫌悪障害(SAD)と診断されることもある。

A セクシュアルが疑問に付す「性欲は本能だ」という言説は、性暴力を擁護するときに用いられることがよくある。したがって、A セクシュアルの議論がフェミニズムや性暴力への抵抗運動へ接続していくことは一見容易なようだが、簡単に接続することは憚られる。例に挙げた通り、A セクシュアルを理解可能な存在にするために、性暴力被害の経験が利用され、病気と診断されることがあるためだ。被害者性を強調し、加害者や被害を隠ぺいする構造を糾弾することと、A セクシュアルな状態を肯定することは、二項対立的な視点では両立が困難である。被害者性を強調する文脈にA セクシュアルを位置づけようとするれば、A セクシュアルは暴力の被害者で傷を克服できていない人という立場に置かれるだろう。A セクシュアルな状態であるということ自体が傷だと判断されるため、その状態であることを肯定することはできず、未来でもその状態にあることは否定的な意味しか持たない。性暴力被害の経験によって性行為を嫌悪している、その説明の中にA セクシュアルの主体は存在しない。

傷ついた未熟な異性愛者というような説明をされていること自体が、A セクシュ

アルとして存在する者の主体を消し去ることだ。仮にAセクシュアルのすべてに性暴力被害の経験があったとしても、この説明に還元されること、Aセクシュアルを性暴力の結果であり、傷の証明とすることは受け入れられない。そのため、Aセクシュアルの議論から性暴力に議論を接続することは、注意を払いながら行う必要がある。

さて、このようにAセクシュアルにとって重要な抵抗の対象は、生殖せよという命令を支えてもいる親密さ＝性生活、性欲＝本能という図式だ。そのため、性生活＝生殖を否定し、性化された身体を異性愛的生殖と(男)性器から解放するバトラーの議論には、半分は協調しつつも躊躇いが残る。とはいえ、バトラーの議論をAセクシュアルにつなげることは可能だろう。

1-2 バトラーによるフロイトとラカンの批判的読解からAセクシュアルへ

第二章「レズビアン・ファルスと形態的想像界」で、バトラーはフロイトとラカンを批判的に読解している。私は、バトラーの行った読解から、自我の形成にかかわる器官は性器か性行為にかかわるものだけなのかという問いを導き、性愛を前提にした統御を問題にできる可能性があると考えている。

バトラーによるフロイトの批判的読解では、性源域は性器を代理するものとして機能すると述べることで、性源域の一つだった性器が起源の場にされることが露わになった。フロイトの文章において起源の場にされる前の性器は、「不安神経症によって輪郭を与えられた身体部位の例」であると同時に、「原型」だったという⁷。つまり以前の性源域は性器に縛られることなく、「性的興奮をもたらす刺激を心的な生に送り込んでくる身体部位の活動」が行われる部位というだけだった⁸。この反転と抹消を露わにすることで、バトラーは性源域が性器に限定されることを疑問視し、レズビアン・ファルスへと繋げていく。

バトラーは同性愛をキーにフロイトを読み替えているので、バトラーのフロイト批判が身体の備給が性生活に縛られることにまで及ぶのかは、わからない。しかしバトラーが、性器は「不安神経症によって輪郭を与えられた身体部位の例」だったということがフロイトによって抹消されることを露わにすると、性源域が性器に限定されないこと以外に、もう一つ思い出せることがある。身体部位に輪郭を与えるものは、性的興奮をもたらす刺激だけではないということだ。

バトラーはフロイトの試論「ナルシシズムの導入に向けて」の内容を追うことから話をはじめ。フロイトは試論において、身体的な痛みへの心的な痛みへの二重化によって身体部位が輪郭をえて認識可能になるという説明を行う⁹。そして自己へのリビドー備給が身体を認識可能にするという話につなげて、「ところで、苦痛なまで

に敏感で、何らかの変化を被ってはいるが、しかし普通の意味で病んでいるわけではない器官の原型 [Vorbild]、私たちのよく知っている原型は、興奮状態にある性器である」と述べる¹⁰。以上のようにフロイトの議論を追ってから、バトラーはフロイトが起源性の主張と理想化によって両義性を乗り越えようとすることを論じる。

「ところで…」から始まる引用において、身体を認識可能にする重要な身体部位として男性器が登場し、リビドー備給は性愛とのつながりを前提に含んでいることが明確になる。ここで、身体部位を認識可能にするリビドー備給は性愛へと結びつけられるようになり、人間の身体認識は逃れがたく性的なものにされてしまう。つまり A セクシュアルの身体が存在する可能性は否定される。

しかし、身体部位の認識を可能にするもの、例えば痛みの二重化は、逃れがたく性愛と関係するのだろうか。リビドー備給は性愛と結びつけられ、性源活動の議論へと移っていくのだが、それだけなのだろうかと問うことは可能だろう。バトラーがフロイトの議論を痛みの二重化による身体の認識から始めているために、性器が「不安神経症によって輪郭を与えられた身体部位の例」であるということは、性源活動が身体部位を認識可能にする活動の一種だということもまた思い出させる。それが意図的なことであるかは別として、A セクシュアルの身体が存在する余白を生むだろう。

次に、バトラーによるラカン読解へと移ろう。ここで A セクシュアルにとって重要なのは、ファルスの変位可能性、反復による脱特権化という性愛の多様性を生む記述よりも、ファルスを鏡像段階のメカニズムで説明しなおすということである。異性愛の統制的権力は、理解可能な許された形で性的であると人々に語り掛けている。だから、多くのセクシュアル・マイノリティが、対象がクィアであろうとセクシーな(性的な)関係なのだと言主張することになる。理解可能性の外部、否定される許されない対象への性愛だとしても性愛なのだというには、ファルスの変位可能性が重要になる。それに対して、セクシーであることを望まないのだと主張するのが A セクシュアルである。そのため、性的刺激が身体と自我の起源にあるという説明が、A セクシュアルにとっては重要な論点となる。

ファルスを鏡像段階のメカニズムで説明しなおすことは、ファルスが鏡像の幻想的理想の身体の一つでしかないという可能性を示すことになる。バトラーはラカンが「ある種の器官は、それが自我の他者との関係と同時に対象世界の構成を構造化する限りにおいて、ナルシズム的關係に参与しています」と書いたとき、生殖器のことを指しているように思われると指摘する¹¹。このような「ナルシズム的に備給された器官が、知覚可能なあらゆる対象や〈他者〉の条件、構造の一部となる」というラカンの文章も引用している¹²。

ラカンにおけるファルスは完全な統御の場になるために、ペニスとの関係、ペニスの代理＝不完全な限定的統御であることを否定している。ファルスは性差を形式化しており、男性はファルスを「持つ」、女性はファルス「である」と図式化され、規範的異性愛と結びついている。人は性行為的にしか他者との関係を築けないのだろうか。ファルスが特権的シニフィアンであり、対象世界を分節化することを可能にする、知覚可能性の条件になるというラカンの主張をそのまま受け入れると、そういうことになる。単一で普遍のファルスが身体の形態や〈他者〉の知覚を統御しているのだろうか。ファルスに統御された意味の中でしか生きられないのなら、そこでAセクシュアルは、統御不可能で去勢された寸断された身体としてしか存在できないだろう。

バトラーはこの特権化されたファルスを鏡像段階で説明しなおす。鏡像段階は部分が全体を代理し、表象することだとすると、ファルスの理論的構築も同様に説明できるとバトラーはいう。ペニスという身体部位が鏡像として全体を代理し、表象することで、身体の形態や知覚可能性を統御するようになる。その鏡像的《幻想》をファルスと名付け直し、さらにペニスとの関係を否定することで、身体の一部位だったペニスの地位を乗り越えようとする。また、鏡の前の寸断された身体と語ることで、ファルスは自身の起源においても前提として作用し、器官でも想像的效果でもないという否認によって、男性器との切り離せない繋がりをもったまま、特権的理想の地位をえると続ける。

バトラーは、ペニスがファルスという特権的シニフィアンになる過程を鏡像段階によって説明することで、以下の問いを再び想起させる。

もし『鏡像段階』が、想像的なものの提喩的機能を通じていかに部分が全体を代表し、いかに脱中心化された身体が中心を持った全体性へと変形されるかを明らかにするとすれば、そのとき私たちは、どの器官がこの中心化する提喩的機能を果たすのか、と問うように導かれるかもしれない。¹³

この問いに向き合う中で、生殖器や性行為に関係する器官以外を、この中心化する提喩的機能を果たす器官として考えることが可能ならば、それはAセクシュアル的な身体の可能性を開くだろう。Aセクシュアル的な身体をファルスのない、去勢された、未だ統御されていない身体ではなく、質的に異なるものによって統御された身体として考えることができる。つまり、バトラーによるファルスの特権化の疑問視は、ファルスが鏡像の幻想的理想の身体の一つでしかないという可能性を示す。このことは、ファルスに代表されるような異性愛的性的刺激が身体と自我の起源に

あるという説明が、普遍的ではないことを示し、性器と性行為に逃れがたく結びつけられたリビドー備給を再構想することを可能にするのだ。

また鏡像段階の議論において、鏡の前の身体が寸断として描写されること自体が、ファルスによって統御されることを前提にしているというバトラーの指摘は興味深い¹⁴。Aセクシュアルは寸断された身体だと思われることが多い。性行為を望まないことは、ファルスによる統御の拒否あるいは無意味化だ。否定されているとはいえ、ファルスは生殖器や性行為を中心にした意味の統御であり、それらを望まない身体は統御以前のものと認識される。前述したAセクシュアルを無力化し未来を奪う方法の一つ、未だ性的ではない身体という見方がそうだ。つまり、まだ性化されていないとしても、いずれ性化されるというファルスを前提とした期待のまなざしの前で、Aセクシュアルは鏡の前の未だファルスに統御されていない身体と認識される。それはいつも、未来においてファルスに統御されることを想定している。ファルスによる統御の普遍性を疑問視するなら、鏡の前の寸断された身体と表現されていたものの意味も変わってくる。

他方でファルスの転位可能性、反復による脱特権化という性愛の多様性を生む記述に注目して、Aセクシュアルとの接続可能性を考えることもできる。バトラーの起こしたレズビアン・ファルスによる攪乱を受けて発展させるなら、Aセクシュアルは性生活やセクシーなものを持たないことを意味しないかもしれない。このような指摘が、Aセクシュアルを他のセクシュアル・マイノリティに還元してしまっていると誤解される危険があるとしても、あえて指摘しよう。Aセクシュアルが決して身体的な接触を望まない形で、セクシーなものとのつながりを持っている可能性はある。例えば、それは腐女子がプロマンスや性的な描写がない作品にもセクシーさを感じるように¹⁵。

ラカンのいうファルスは、異性愛を基準に世界を認識可能にする特権的シニフィアンであるため、バトラーのレズビアン・ファルスの攪乱を拡張するなら、性生活やセクシーという言葉も意味が変化していくはずだ。レズビアン・ファルスは、ファルスを「持つ」という言葉の質的变化を伴うものだという。ファルスのようにセクシーの意味も、異性愛関係によって規定された意味から転位することで全く変わっていくのなら、身体的な接触や性行為を想起するものに限定されない可能性はある。そして当人たちがセクシーだと感じていなくても、他者から見てセクシーな関係である可能性もある。そもそも、人の性行為(貫通するものと貫通されるもの)やそれを想起させるものを見てセクシーだと感じるはずだという思い込みは、みんながセクシーだと感じる基準に異性愛があるということを前提にしている。ファルスの転位可能性はどこまでセクシーの基準を乱すことができるだろうか。

レズビアン・ファルスによってバトラーが示唆するものは、「ファルスは、それが結び付けられた規範的異性愛の光景とは決定的に異なる、同一化と欲望の両義的な場を構成する」ということだ¹⁶。ファルスの転位は、ファルス＝ロゴス中心主義の特徴である異性愛的、人間中心主義的な基準からして、全く性行為を想起しない身体部位にまで及ぶだろうか。バトラーの起こしたファルスと性生活の攪乱は、もはや当人も含めて決してセクシーとも性生活とも感じないもの、認識していないものでさえ、身体の備給における主要な器官になる可能性があることをも示していると考えられないだろうか。

このように、フロイトのリビドー備給やファルスを鏡像段階のメカニズムで説明しなおすこと、ファルスと性生活の攪乱に注目することで、第二章「レズビアン・ファルスと形態的想像界」をAセクシュアルに接続することは可能だ。フロイトとラカンの精神分析の中に含まれているAセクシュアルにとって問題のある説明、つまり性的刺激と性的器官が身体と自我の起源にあり、関係や世界の条件になるという説明を、バトラーの攪乱を拡張することで疑問に付すことができる。心的なものと物質的なものの緊張関係が身体の輪郭と形態そのものであり、近似は失敗することもあるという主張は、性的刺激を特別視しなくても機能するだろう。

さて、以降の節へとつなげるために、以下のことを語らなければならない。Aセクシュアルであり続ける未来の可能性の抹消を批判することは、Aセクシュアルが一貫してAセクシュアルであり続けることを意味しないし、Aセクシュアルをセクシュアル・アイデンティティとして強固に不変化することでもない。つまり、本稿でとりあげる三つの身体は排他的なものではない。先ほど否定的な印象を持たれてしまいかねない形で語ってしまったが、Aセクシュアルを理解可能にするためにされる説明をただ拒絶するのではなく、可能性として接続していくことはできると考えている。Aセクシュアルがそれらに還元されることを拒否することは、Aセクシュアルとそれらの繋がりを拒絶することではない。

例えば、本論の第二節では接続に注意が必要だと述べた性暴力について議論する部分があり、第三節では動物性愛や植物性愛に接続できるかと問う。どちらもAセクシュアルを理解可能にするためにされる説明の一部である。前者は、本当は異性愛者だが傷のせいで性行為を恐れているだけだという説明に用いられ、後者は異性愛から逸脱したのだから無いと感じているだけで、本当はあるのだという説明に用いられる。前者では、傷ついた未熟な存在としてAセクシュアルの未来が抹消されることになり、後者では本当は性行為や性的に惹かれることを望む存在なのといい、Aセクシュアルの存在を他のセクシュアル・マイノリティに還元してしまう。これらの説明は嫌気がさすものだが、性暴力や動物性愛、植物性愛とAセクシュア

ルが理解可能性の境界に関して問題を一部共有しているのは確かだ。

2. ポールの死における両義的な行為能力の肯定

ここでは、第五章『『横断危険』—ウィラ・キャザーの男性的名前』の最後の節「停学処分下の身体」で行われるバトラーによる「ポールの場合」の解釈をきっかけにして、自殺において殺されるものと、死において現れる行為能力について思考していきたい。まずは、バトラーによる「ポールの場合」の解釈をまとめることから始める。

「停学処分下」にあるポールは地位の決定が「停止＝宙吊り」^{サスベンド}されており、ポールの身体は統制的規範を引き受けることや一貫性を拒否していると、バトラーは解釈する。第二章「レズビアン・ファルス」の内容を思い起こすと、ポールが特定の身体部位を特権化することでファルスを引き受けること、特定のジェンダーやセクシュアリティであることに身体を還元することを拒否しており、分裂した身体で生きていることが理解しやすい。

ポールは「意図的ヒステリーという撞着語法のように、尋問者たちの観察から自らを防衛する中で分裂してしまう」が、ニューヨークに逃げ移り、一時的に自由を得る¹⁷。そこでポールは自分自身を観察する位置を受け、身支度を行い鏡に映る自分の姿に満足するようになる。「だが、根本的な自己創出の幻想は、負債を負い、無法者となり、最終的には逃亡者となることを代償として維持されるだけに留まることはできない」とバトラーはいう¹⁸。ポールは観察する機能を迫害者に取り返され、列車の前に飛び込むラストシーンへ向かう。

以下は第五章のバトラーによる「ポールの場合」の結末の解釈だ。

禁止を行う精査から解放され、身体はそれ自体の解体を通じてのみ自らを自由にする。「ポールは万物の深遠な意図^{デザイン}へと戻っていった」という結末の形象は法の究極的な力を証立しているが、この力は、それが「予め排除」^{フォアクローズ}しようとするエロティシズムを意図せざる仕方で持続させている。これは彼の死なのだろうか、それとも彼のエロスの解放なのだろうか。「ポールは戻っていった」。すなわち両義^{アンビギュアス}的にも他者によって、そして彼自身によって

一抑止され、そしておそらく最後には明け渡された彼の行為能力によって一戻っていったのである。¹⁹

ポールの分裂した身体は、無法者になり逃亡者になっても自由を維持し続けることができず、「身体はそれ自体の解体を通じてのみ自らを自由にする」ことになる。ポールの死の行為能力とその主体はバトラーによって「両義的にも、他者によって、そして彼自身によって」と表現されている。ポールの死は、たしかに法と迫害者的な観察者に追い詰められた結果ではあるが、それらから逃れ、身体を解体することで自由を得ようとしたのはポールだ。ポールは誰かに押されて列車に飛び込んだのではなく、自ら飛び込んだ。この世での「退屈な説教に対する反抗」というゲームに負けたとしても、ポールは法や迫害者的な観察者を満足させる統合された身体になりはせず、身体自体を解体した。

もし、死の行為能力とその主体をすべてポールにあるとしてしまえば、それは暴力的な自己責任論であり、ポールが迫害者的な観察者に追い詰められていたという社会的な状況を見捨てることになる。しかし、逆にポールは法と迫害者的な観察者によって殺されたのだとしてしまうことも暴力的な説明だろう。それは、本当にこの世から統合に抗して存在するものやその人たちの意志を消し去ってしまうことだ。

ポールの死の行為能力について、バトラーが「両義的にも、他者によって、そして彼自身によって」と表現したことは重要だ。ここで表現された行為能力は、『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』で生んでしまった服を着る主体という誤解に対して、『問題＝物質となる身体』でバトラーが答えた主体の一例だと考えられるだろう。

『ジェンダー・トラブル』は、ジェンダーは服のように人が選択することができる行為であって、それを行う主体、身体、人が存在するという主張だと誤解されてしまった。この誤解は、バトラーがジェンダー形成とともに、身体やセックスといった物質と考えられているものも形成されると考えていることを見落としている。この誤解に応答し、『問題＝物質となる身体』では、身体とセックスがどのように引き受けられ、引き受けるという引用と反復行為の中で変化したり、失敗したりする可能性があることが語られる。この本では、『ジェンダー・トラブル』の誤解によって残された物質的で社会から切り離された領域、セックスと身体を脱構築しており、自由に服を選択するような独立した主体を否定している。

バトラーは、ポールの死の行為能力が両義的なものだとして解釈したが、そのことはこのような主体に関するバトラーの考えと対応しているだろう。死における行為能力を論じることは危険を伴うが、それでも両義的な緊張関係の場で生きる人間の主

体、行為能力、書き換えの可能性を考えるには、死において破壊的に現前する行為能力を否定することはできない。

ここで、バトラーが kill という単語を使わずにポールの死を説明していたことに注目したい。上記の引用にもある通り、バトラーは死かエロスの解放か²⁰という問いかけを行っている。このことから、死において破壊的に現前する行為能力をとらえるためには、自殺や「殺」という言葉よりも自死や「死」という言葉が適しているのではないかと考えてみたい。

殺すという強力な他動詞、この動詞に耐えられる強固な主語になれる選ばれた主体とは、何なのだろうか。ポールの死に現れたポールの行為能力は、この強力な他動詞に耐えられないだろう。「殺す」の主語になるには、疑いと揺れが存在してしまう。両義的な形でしか現れない主体、そのうえ自己の防御のために身体を分裂させたポールには、「殺す」の主語になれる強固さはない。

では、「殺す」の主語になれる可能性がある両義性から独立した主体とは、どのように形成されるのだろうか。バトラーの議論を応用するなら、ファルス＝ロゴス中心主義的な主体と同様に、両義性から独立した主体は形成過程が抹消されることでその完全さ、決して支配されない支配者という位置に立つことが可能になる。そのように形成過程が抹消された主体は、「殺す」の主語となるための強固さを持っている。両義的な主体が、両義的であることを自覚するならば、その文脈においては「殺す」の主語になることは難しいだろう。少なくとも両義性を肯定するなら、「殺す」の主語になることで強固な輪郭を与えられ、逆説的に「殺す」の主体になる前から強固な主体として存在していたとされてしまうことを望まないはずだ。

さらに「殺す」の主語になることについての仮定を進めて、自殺、つまり自らを殺すこととしてポールの死を表現する問題点について考えてみる。自殺と表現した場合、ポールの死はポール自身が法権力や迫害的な観察者の立場に立ち、分裂した身体で存在する自分を許せずに殺したことになるだろう²¹。ポールが「殺す」の主語と目的語になることで、ポールは主語になった迫害的な観察者の代理としてのポールと、目的語になった分裂した身体のポールに分かれてしまう。この場合、ポールの「自殺」は完全にポールの反抗の失敗であり、決してエロスの解放という含意を持つことはない。ポールの自殺ではなく、ポールの死と表現するからこそ、そこにエロスの解放の可能性を考えることができるのではないだろうか。

両義的な行為能力を肯定することの重要性は、おそらく死において現れる主体を肯定するときだけに言えたことではない。例えば、第1節でもあげたセクシュアル・マイノリティであることが、性暴力の経験に還元されるべきではないという話にもつながる。異性からの性暴力を経験した人が、同性愛になったり A セクシュアルに

なったりしたとき、それを強固に逃れがたく性暴力の経験と結びつけることは、なされるべきではない。それは最もありうると考えられるため説得力を持つ可能性で、医者や権威ある人を含めて様々な人にそういわれるだろう。

だとしても、以下のように問わねばならない。そのセクシュアリティでいる以上、「自由」では、「主体」ではないのか。今の自分は逃れがたく性暴力の被害者でしかないのか。確かに性暴力を受けた身体であり、その影響がないと言えるわけがないが、それでもその身体で生きなくてはならない。そのときに、傷ついた身体、そのうちにあるセクシュアリティは、主体的な私ではなく被害の傷でしかないのか。セクシュアル・マイノリティである現状は、ショックで血迷っているだけの異常状態で、時間をかけて「もとの」²²セクシュアリティに戻すことが、正常への唯一の道なのか。変わることを前提としなければ、今の傷ついた身体を受け入れ、愛することはできないのか、あるいは愛すべきでないのか。

犠牲者性や被害者性を強調しすぎることは、その後の回復の道を縛り付けることにも繋がるだろう。両義性のある主体を捉え損ね、決して完全に同一になることはできないという同一化の含みを忘れてしまうと、同一化に失敗した主体や揺れる主体を認識することができず、気づかずに抹消するという暴力を行ってしまう。回帰すべき唯一の場所、生きられる唯一の形態という幻想が未来を縛りつける。

異性愛規範の正常なセクシュアリティ、望ましい身体という前提を受け入れ、その通りであるためには、今の傷ついた身体は未来においても抹消されなくてはならない。この前提はつまり、形成される過程を抹消することで可能になる完全な主体こそが主体であり、すべての性愛の原型は異性愛であり、性化の原型は生殖器であることが本能によって約束されているということだ。これらの前提には性愛、生殖という本能が人間を形作るということがさらなる前提として底を流れている。これらを前提にすることで、不安定な主体がそれでも振り絞った表現や動きさえも、その手から奪い取って、消し去ってしまう。

バトラーがポールの死から読み取った、死に現れる行為能力、それは一貫して理性的で支配されることがない支配者としての主体とは別の主体を示している。ジェンダーを服のように着る自由で決して支配されていない主体ではなく、反復の繰り返しの中で、自身を形成してもいる言葉の意味をずらしていくような制限された行為主体の存在だ。バトラーがフーコーの言葉を発展させて用いた、「統制的権力」との緊張関係を持ちながら生きる主体だ²³。

ポールの死を法権力の強力を強調する説明、法権力によって殺されたという説明に還元してしまえば、死において現れる行為能力や主体すらも抹消することになる。両義的な行為能力を肯定することは、人間が理想への完全な同一化はできず、

不完全な主体として生きるほかない中で、暴力的な抹消を問題視し、緊張関係と反復によって変化していくことを信じる時必要になる。

3. 問題なのはエビの身体だ

この節ではフェミニズム政治とクィア政治の結集点、批判的関心事となる身体²⁴として、エビをとらえることはできるかに挑戦する。エビの登場に突飛すぎると驚く読者も多いだろう。なぜエビなのかを説明するために、私が初めてエビの身体をめぐる問題に出会った「横浜トリエンナーレ 2020」のエレナ・ノックスの作品《ヴォルカナ・ブレインストーム》について話をしよう。

《ヴォルカナ・ブレインストーム》は、日光を当てることで循環するように設計された完全に密閉された水槽(エコスフィア)の中で、エビが繁殖をやめてしまう問題を解決しよう、「セクシーじゃないエビを助けよう」というテーマの参加型インスタレーション、パフォーマンスだ²⁵。ノックスの呼びかけに応じて集まったアーティストの作品が展示され、プロット 48 の一角はエビに覆われた。

エビはエコスフィアにおいてだけでなく、養殖の場でも望ましい繁殖を行ってくれないという問題があり、雌のエビに産卵させるために、眼柄切除が行われてきた²⁶。眼柄切除とは、エビの目を切除することで、卵の成熟が抑制されるホルモンを放出する部位を根こそぎ取り除くことだ。それによって卵の成熟が早まり、稚エビを安定供給できる。しかし、身体に傷を負ったエビは長く産卵活動を行えるわけではなく、効率的とはいえない。エビは養殖の現場で、「生殖せよ」という命令によって身体部位を切除され、望ましい生殖を行う性化された身体へと変えられている。

《ヴォルカナ・ブレインストーム》の中には、ティム・バーンズと江幡京子による《Eyestalk ablation》という作品がある。Eyestalk ablation とは、エビの眼柄切除のことである。この展示では、雌のエビのように女性は閉じられた地球の中では、傷がなければ生殖することができないのか、弱い立場であれば生殖するのかが問われていた²⁷。そして、眼柄切除の説明が書かれた紙の貼られた壁の横に、

But we are not shrimp

ただどわたしちエビじゃないし

と書かれていた。

その通り、私たちはエビじゃない。エビの身体イメージを知ることはできないし、代弁もできない。異なる立場にいる。だが、正常で望ましいものを再生産する性化

された身体を暴力的に生み出す「生殖せよ」という命令に、ともにさらされている。眼柄切除の説明の隣に「だけどわたしたちはエビじゃないし」と書かれていることで、わたしたちはエビじゃないという言葉で切り捨てられるものと切り捨てられないものがあることを、強く感じる。

バトラーはインターセックスの人々や「中間的」性徴を持つ人々に対して、性別の二分法が外科的「矯正」という暴力的要求となることを記している²⁸。これらの人々に対して、生殖をする性化された身体に同一化させるために、身体部位の切除といった矯正が行われることを、性別二分法の暴力の例に挙げている。はたして、わたしたちはエビじゃないのか。

また『問題＝物質となる身体』第二章でバトラーは、フロイトとラカンを批判的に読解することを通じて、身体を代理、表象し、中心化する提喩的機能を持つとされる身体部位が生殖器に限定されること、ファルスの転位可能性が抹消されることを批判的に分析した。生殖器を物質的なものと考え、それによって性化された身体と男女の二分法を物質的なものとして捉えることは、「中間的」性徴を持つ人々や生殖を行わない身体に対する暴力と排除を支えてしまう。これを批判するとき、エビの身体も「性的差異を物質化する統制的規範への非同化」として捉えることができるだろう。

《ヴォルカナ・ブレインストーム》は、エビと人間の他者性、理解できなさを前提に、面白おかしく、時に真面目にそれを乗り越えようとする人間がやつきになるという面白い展示だ。エビのことが分からないという思いが頻りについて回る。だが、エコスフィアで繁殖をしないエビがセクシーではないということは、テーマの前提である。参加型インスタレーションなので、テーマを疑問に付すような表現が生まれることに解放されているとはいえ、多くの作品はテーマに則ってエビ用の AV を作ったり、エビを擬人化したりするものだった。

なぜエビが繁殖しないことは、エビがセクシーではなく、救われるべき問題のある立場にあるということになるのだろうか。エビが全く繁殖を行わない、わかりやすく人間に感知できる快感をえる行為を行っていないとしても、セクシーな気持ちになっていないのかは分からないのではないだろうか。何が性生活なのかは、エビが変化させていくもので、それが私たちに認知不可能なことであっても何も不思議ではない。エコスフィアで繁殖をしないエビがセクシーではないという前提は、エビを擬人化し、ファルス＝ロゴス中心主義的に捉えた結果のように思われる。

エビに対して、バトラーの議論をそのまま適用することは横暴だが、エビだからといって性行動を繁殖に限定すること、動物の自然な行為として雄と雌の繁殖を想定することも横暴だろう。エコスフィアの生殖を行わないエビが、セクシーでない

とは限らない。直接的暴力である眼柄切除とは異なる、AVなどの方法でエビを興奮させようとする《ヴォルカナ・ブレインストーム》のいくつかの作品は、エビに優しいように見える。だが、生殖と性行為とセクシーな気持ちを不可分なものと考えたり、エビを擬人化して捉え、性別二元論やファルス＝ロゴス中心主義によって理解しようとすることで、養殖の場で逃れがたく発せられ続ける「生殖せよ」という暴力的命令に吸収されてしまうだろう。

「生殖せよ」、望ましい生殖を行う性化された身体であれという命令によって、身体部位の切除という暴力が行われる。この文脈における性化された身体とは、貫通する男性と貫通される女性である。「性的差異を物質化する統制的規範」は、エビの身体に対しても作動している。これを確認したうえで、《ヴォルカナ・ブレインストーム》の上階で上映されていたジェン・ポーの作品《Pteridophilia》、シダ植物と人間との性愛をはじめとした異種間の性愛を表現した作品ら²⁹は、それでも倒錯として未来のないものなのかと問うことができるだろう。しかし、この問いに答えるのはまた別の機会にしておこう。

繁殖しないエビがセクシーではなく問題だとされるのは、それがエコスフィアの死を意味し、未来がなくなってしまうからだ。だが、本当にエビの死は未来をなくしたのか。エビが繁殖しないことによって、エコスフィアの循環は失敗に終わるとしても、地球ではどうだろうか。地球はエコスフィアのように密閉されていないし、人為的に循環するように計画された場所でもない。

このことを鮮やかに描き出している本に、アナ・チンの『マツタケ：不確定な時代を生きる術』がある。この本は、資本主義的な搾取によって破壊された土地で生きるとき、マツタケとの予期せぬ出会いによって、資本主義の周縁で生きる術が見つかる様子を鮮やかに描き出している。そのとき重要なのが、その予期せぬ出会いに気付くための術であり、それはマツタケとのダンスとも表現される。

アナ・チンは遺伝学と進化論を結び付けた「総合説」、種の自己創造物語がはびこることで、菌が世界を構築する偉業が評価されてこなかったことを批判した³⁰。「総合説」では生殖細胞が影響を受けなければ、変化が子孫に伝わることがないということ根拠に、「種の自己複製は生態学的な出会いと歴史の紆余曲折から保護されている³¹」と考える。つまり、種の生殖は自己完結していると考えられる。しかし、人間だって「産道から滑りでるときに獲得する有益な細菌がなければ、食物を消化することができない³²」ように、生物の生は他種との相互作用に支えられていると、アナ・チンは指摘する。

『マツタケ』は、人工栽培できないマツタケと人間の関係を描くことで、予期せぬ出会いを排除して、世界のすべてをスケーラビリティや自己完結の論理で管理で

きると考える人間の思い上がりを批判する。このような視点からエコスフィアのエビに思いをはせると、人間が規格化したエコスフィアを地球と同じもののだとして、そこで繁殖しないエビを問題視することも、その一種に見える。

また、自己創造物語が菌の偉業を無視することによって、種の自己完結を可能にしていることは面白い。この構造は、バトラーが批判したフロイトとラカンによるファルスの理想化とよく似ている。バトラーはファルス＝ロゴス中心主義が人間中心主義的性格を持つものだと述べた³³が、自己創造物語も人間中心主義的な思い上がりだ。ファルスの理想化も自己創造物語も、不確定性や予期せぬ出会いによる変化を排除し、他者や世界との接近可能性と身体を統御しようとする欲望だといえるだろう。

エコスフィアにおけるエビの身体は、規格化された入れ物の中でエビを管理しようとする人間の欲望と、繁殖しないエビをセクシーではないと表現し、性的興奮を煽ることによって何とか繁殖させようとする性の統制的権力の押し付けが並行する場だ。このようなエビの身体から出発して、私たちは人間中心主義やファルス＝ロゴス中心主義的な押し付けではない形で、「性的差異を物質化する統制的規範」に非同一化している身体を認識し、そこにある様々な可能性の中に飛び込むことはできないだろうか。そして生殖から離れて、別の意味で未来のある関係を想像できないだろうか。自己創造物語ではなく、不確定な出会いの中に身を置きながらダンスすることはできないだろうか。

おわりに

本稿はジュディス・バトラー『問題＝物質となる身体』を親密さ＝性生活、性欲＝本能という図式を批判する A セクシュアル的な視点で解釈することで、未来がないと思われるものがなぜそのように思われてしまうのかを考え、未来がないと思われた存在の未来の可能性を示してきた。

第一節では、同性愛を軸にしたバトラーの議論において直接批判されることは無かった「性的刺激が身体と自我の起源である」という精神分析の前提を、バトラーの議論から疑問に付すことができるのではないかと考え、A セクシュアルへの接続を試みた。その中で、A セクシュアルが傷ついた未熟な異性愛者として未来を生きる可能性を抹消されることの問題も指摘した。異性愛的な性差を形式化し、対象の認識可能性の条件にもなる特権的シニフィアン、ファルスが、唯一普遍的に人間の身体を統御するものなら、そこに A セクシュアルの居場所はない。A セクシュアルは、統御されることが前提とされた寸断された身体だと認識されることになる。

バトラーの起こしたファルスや性生活についての攪乱は、A セクシュアルの未来が抹消されることに抵抗するために重要な「性的刺激が身体と自我の起源である」という考えを疑問に付すことを可能にする。バトラーは、ファルスが構築されていく過程、その過程の否認を暴露することで、リビドー備給が性愛に限定される必要はないのではないかという疑問や鏡像段階において身体の全体を代表する身体部位が何かを考えることを可能にしてくれた。

第二節はバトラーによる「ポールの場合」の解釈から、傷ついた主体と両義的な行為能力を肯定することの重要性について考えた。近代的な確固たる自我なんてないと一般に受け入れられるようになっているとはいえ、それでも傷ついた主体のクリアな性は病とされてしまうことが多い。被害者性の強調は、傷ついた主体を婉曲的に否定し、回復の道を異性愛的な正常さへと限定することになってしまいかねない。また、傷ついた主体や両義的な行為能力はセクシュアル・マイノリティにのみ重要な概念ではない。理想化された像に完全な同一化はできないこと、不完全な主体として生きるほかないことに向き合いながら、すべてを放り投げてしまわずに、よりよく変化していく未来を信じ、行為遂行性に希望を持つために必要な概念だ。

第三節はアーティストであるエレナ・ノックスの作品《ヴォルカナ・ブレインストーム》を通してエビの身体へと展開し、エビの身体に働く性の統制的権力とともに、ファルス＝ロゴス中心主義の人間中心主義的な特徴や単一種の再生産といったスケーラブルな世界観を批判した。バトラーが『問題＝物質となる身体』で語ったフェミニズム政治とクリア政治の結集される批判的関心事となる身体としてエビの身体をとらえてみることで、異性愛的な単一種の再生産という見方では見えない未来の可能性を想像することへ、アナ・チンの『マツタケ』へと議論を広げた。

バトラーの『問題＝物質となる身体』を拡張しながら、私がこの三節で行ったことは、異性愛やファルス＝ロゴス中心主義によって未来を否定される存在の未来の可能性を考えることだ。私たちの未来に対する視野はとても縛られている。例えば、絶滅危惧種の保護や種の保存に関する議論では、繁殖が死を上回っていることが未来のあるシステムということであり、財産の継承という議論では、婚姻関係にあることが未来のある関係ということになる。生殖と婚姻が未来であるという見方は根深く、私たちの未来の可能性と視野を異性愛に縛りつけている。

そのような見方では、統御や回復や成熟によって異性愛的な未来を迎えるように救済されるべき、寸断された、傷ついた、未熟で異常な身体だと考えられるものが、未来にもそのまま存在していることを肯定することはできない。しかし、本当にそのような身体には未来がないのか。『マツタケ』は別の見方があることを示してくれた。私たちは規格化されたエコスフィアの中で生きているわけではないし、単一種

で生きているわけでも、再生産を行っているわけでもない。

私が未来にこだわって本稿を書いたのは、逸脱した現在を誇り、肯定するためには、未来でも存在し続ける可能性を肯定することが必要だと考えているからだ。また異性愛的な未来しか認めないなら、バトラーの行為遂行性、引用や反復によって生まれる逸脱は制限を受けてしまうだろう。ファルス＝ロゴス中心主義とは異なる未来を想像することが、行為遂行性の可能性を広げてくれることを願っている。

¹ Aセクシュアルの問題系というものは、Aセクシュアルの研究自体が少ないため、十分に議論された領域ではない。ここでAセクシュアルの問題系と表現しているものは、私がAセクシュアルと関係して希望の持てる、あるいはともに議論することが可能で有意義だろうと想像しているものだ。否定の接頭辞aとsexualで構成されたasexualという言葉で表されるものは、Aである理由を問われる。動物はセクシュアルであるはずなのに、それを否定するとは何事かと問われることになる。そのため、「無い」とはどういう誤解なのかと、このAには様々な憶測が寄せられることになる。この憶測は主に異性愛規範、男女の二分法によって周縁化される存在と接続されている。これは逆説的にAセクシュアルとAに寄せられた憶測が、これらを周縁化したり排除したりしている規範にとって問題を共有していることを表してもいるだろう。私はそれをAセクシュアルの問題系として広く捉えることに意味を感じる。

² 第六章「パッシング、クィアリングーネラ・ラーセンの精神分析的挑戦」では『パッシング』の考察を行うことで、「同性愛と人種混交」について議論している。だが、『問題＝物質となる身体』において一貫して「排除領域」^{フォアクローズ}「構成的外部」として想起されるものは同性愛であり、それがフェミニズムの議論と接続していくという形をとっている。

³ 第一章ではリュス・イリガライが、男性中心主義的理性の構成原理から排除されるものを女性に限定することを批判し、第七章ではスラヴォイ・ジジェクが象徴界の理解可能性の『内部』と『外部』の境界を固定してしまうことを批判している。

⁴ ジュディス・バトラー『問題＝物質となる身体：「セックス」の言説的境界について』佐藤嘉幸監訳、以文社、2021年、p.315

⁵ 同上 p.8

⁶ 同上 p.ix

⁷ 同上 p.81

⁸ 同上 p.80

⁹ 同上 pp.78－80

¹⁰ 同上 p.81

¹¹ 同上 p.103

¹² 同上 p.104

¹³ 同上 p.106

¹⁴ 同上 p.110

¹⁵ 北村紗衣『お砂糖とスパイスと爆発的な何か：不真面目な批評家によるフェミニスト批評入門』書肆侃侃房、2019年、pp.35－41

¹⁶ ジュディス・バトラー『問題＝物質となる身体：「セックス」の言説的境界について』佐藤嘉幸監訳、以文社、2021年、p.115

17 同上 p.222

18 同上 pp.224

19 同上 pp.224—225

20 "his death or his erotic release?" Judith Butler, *Bodies That Matter: On the Discursive Limits of "Sex,"* (New York & London: Routledge, 1993), 166.

21 「殺」に対する個人の関係は文脈に依存していることを忘れてはならない。「殺」を殺されるとしてしか想像できないことは、ある面での殺されやすさを証明しているが、自分が時に形成過程が抹消された主体の位置に立ち、無批判に何かを自然なこととして受け入れることで、誰かを殺す(抹消する)ことを棚上げすることにもなりかねない。

22 本人が自身を異性愛者だと宣言したかどうかに関わらず、「もとの」セクシュアリティへ戻るべきだという主張は、異性愛を想定して言われる。また、「もとの」セクシュアリティは、不変の本質としてセクシュアル・アイデンティティがあることを想定してもいる。自然にたいていの人間は異性愛者であり、それはトラウマや傷がなければ変わらないという考えがある。

23 ジュディス・バトラー『問題＝物質となる身体：「セックス」の言説的境界について』佐藤嘉幸監訳、以文社、2021年、pp.394—395

24 同上 p.8 はじめにでも引用した部分。

25 「展覧会をオンラインで楽しめる『バーチャルツアー』」、横浜トリエンナーレ 2020、2020/9/24(最終閲覧日 2021/10/29)

<https://www.yokohamatriennale.jp/2020/news/tour/>

ここから《ヴォルカナ・ブレインストーム》の作品と説明の一部を閲覧できる。

26 「エビの目を切除エビ養殖での一般的な慣行」、ANIMAL RIGHTS CENTER、2020/7/22(最終閲覧日 2021/10/29)

<https://arcj.org/issues/fish/eyestalk-ablation/>

漆原次郎、「『エビに優しい』養殖技術、日本から世界へ」、JBPRESS、2019/10/18(最終閲覧日 2021/10/29)

<https://jbpres.ismedia.jp/articles/-/57946>

27 kyokoebata、「Eyestalk Ablation, Yokohama」、Kyoko Ebata、2020/7/19(最終閲覧日 2021/10/29)

<http://kyokoebata.com/2020/07/eyestalk-ablation/>

28 ジュディス・バトラー『問題＝物質となる身体：「セックス」の言説的境界について』佐藤嘉幸監訳、以文社、2021年、pp.viii-ix

29 横浜トリエンナーレで展示されたジェン・ボアの作品は Pteridophilia 1～4、疑似交接（撮影者：マッテオ・ベルリ、コリン・パウアー）、葛飾北斎《蛸と海女》である。これらの作品と説明も注 25 のサイトから一部閲覧できる。

「ジェン・ボア（鄭波）」、横浜トリエンナーレ(最終閲覧日 2021/10/29)

<https://www.yokohamatriennale.jp/archive/artist/z/artist641/>

30 アナ・チン『マツタケ：不確定な時代を生きる術』赤嶺淳訳、みすず書房、2019年、pp.209—221

31 同上 p.213

32 同上 p.215

33 ジュディス・バトラー『問題＝物質となる身体：「セックス」の言説的境界について』佐藤嘉幸監訳、以文社、2021年、p.105

**Considering the Possibility of Futures for Beings Whose
Future is Denied:
An Asexual Interpretation of Judith Butler's *Bodies
That Matter***

Reina IMURA

After publication of the original in 1993, the long-awaited Japanese translation of Judith Butler's *Bodies That Matter: On the Discursive Limits of "Sex"* was published in May 2021. By extending discussion of this book to the asexual problem system, I want to show the possibility of futures for beings whose future is denied.

The main point of *Bodies That Matter* seems to be the exclusion that makes for natural, pre-discursive matter and finding hope in the possibility of deviation in repetition. Butler analyzes the discourse that establishes the pre-discursive via a thorough deconstruction, showing that the very power that repetition empowers can also be displaced by repetition.

Notably, Butler mainly treats the discussion of homosexuality and women as "foreclosed," but that discussion is not confined to homosexuality and women. Butler refuses to monopolize the sphere of exclusion, and the author's stance of thoroughgoing deconstruction and performativity calls for openness and change.

In this paper, I will connect the three bodies exposed to exclusion in *Bodies That Matter*, using such keywords as asexuality, death, future, nonhuman, and reproduction. In the paper's first section, I will present an asexual reading of Chapter 2 of *Bodies That Matter*. In the second section, I will consider the ambivalent subject, referring to Butler's interpretation of Paul's death in Chapter 5. In the third section, I will consider the body of the shrimp as a body that is disidentified with regulatory norms to materialize gender differences.